

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の文化財 ⑧1 般若寺塔跡

奈良時代 大字南字般若寺所在

西鉄二日市駅北側の丘陵に般若寺とよばれる小字があります。以前から古瓦や礎石、土壇の存在が知られており、鎌倉時代の七重石塔（平成元年六月一日号 太宰府の文化財⑨）も残るなど、この辺りにお寺が建っていたらしいというの推測されています。

ただ、その詳しい実体は明らかでなく、現在でも次のようなことがわかるのみです。

上記の写真は塔跡で、塔の心礎が一個残っています。最近の発掘調査で塔は、一辺が四十尺（一・九㍎）の瓦積み基壇をもっていることがわかりました。この大きさは、古代の寺院の塔としては各地に見られる規模だということです。

建てられた時期は八世紀、奈良時代で、平安時代まで活動を続けていたらしいと考えられています。

他に、塔跡の東に近接して、廂を持つ掘立柱建物が見つかりました。この建物の性格、塔との関係、先後関係などはわかっていません。また般若寺地区の丘陵北辺で東西に延びる柵列が出土しており、般若寺の寺域を限る柵列の可能性も出てきました。

しかし、現状ではポツポツとした点状の調査の成果ですので、明確なことは言えず、将来の調査研究が待たれます。

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の文化財 82

四仙騎獣八稜鏡

長径11センチ 稜厚0.45センチ

宮ノ本遺跡出土

この鏡は、太宰府西小学校近くの宮ノ本遺跡で平安時代初めの墓から出土しました。県道福岡筑紫野線の拡幅工事のために昨年十月から発掘調査していた時です。写真でわかるように鏡の縁が八枚の花弁の形をしているので八稜鏡とか八角鏡と呼ばれています。四仙騎獣というのは円の内側(内区)に、向かい合う一対ずつの霊獣と霊鳥に乗り飛翔する四神仙が表されているからです。この写真では上下が鳥、左右が獣です。どんな種類の鳥獣か、はっきりわかりませんが、鳥は鶴・鳳凰、獣は獅子・麒麟などが考えられています。外区には双葉の花枝と虫(蝶や蜜蜂)が交互に鑄出されています。この鏡が大変注目されるところは、これと同じ文様をもつ鏡が奈良・正倉院の御物に三点と京都・長岡京跡出土に一点あるからです。そしてもともとは中国の唐で造られた鏡が原型なのです。その輸入した中国製の鏡自体を鑄型として、日本で造った(踏み返し鑄造)のが前述の鏡で、踏み返し鑄造を繰り返すと、文様は徐々に不鮮明になっていきます。宮ノ本出土のこの鏡は正倉院や長岡京跡のに較べると、かなり文様が不鮮明です。これらをまた鑄型にして造っていったのでしょうか。一枚の鏡を通していろんなドラマが見えそうです。

太宰府

1992
4.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



太宰府の文化財

⑧3

無縫塔 (大応国師の墓)

鎌倉時代
横岳崇福寺別院

無縫塔はその形から卵塔とも呼ばれ、僧侶のお墓です。

中国にはじまり、鎌倉時代、禅宗と共に日本に伝えられました。さらびやかなものを極力避けようとした禅の考え方は、墓標も一塊の石をもってするとしたわけです。

この崇福寺の無縫塔は、開山大応国師・南浦紹明の分骨塔で、瑞雲塔とも呼ばれています。

日本で最古の無縫塔は、一二二七年に亡くなった京都泉涌寺の僧俊・苅の墓で、この瑞雲塔はその次くらいに古い塔と考えられています。

写真のように初期のころの無縫塔は、基台の上に六角ないしは八角形の竿と呼ばれる柱があり、一番上に卵頭が置かれています。時代が下るにつれて、竿が省略され、卵頭がだんだん大きくなって先が尖ってきます。禅宗のお寺でよく見る形です。

さて、大応国師は鎌倉時代の臨濟宗の僧で、宋へ渡り、帰国後、姪の浜の興徳寺を開き、大宰府の崇福寺に移って三十三年間住しました。

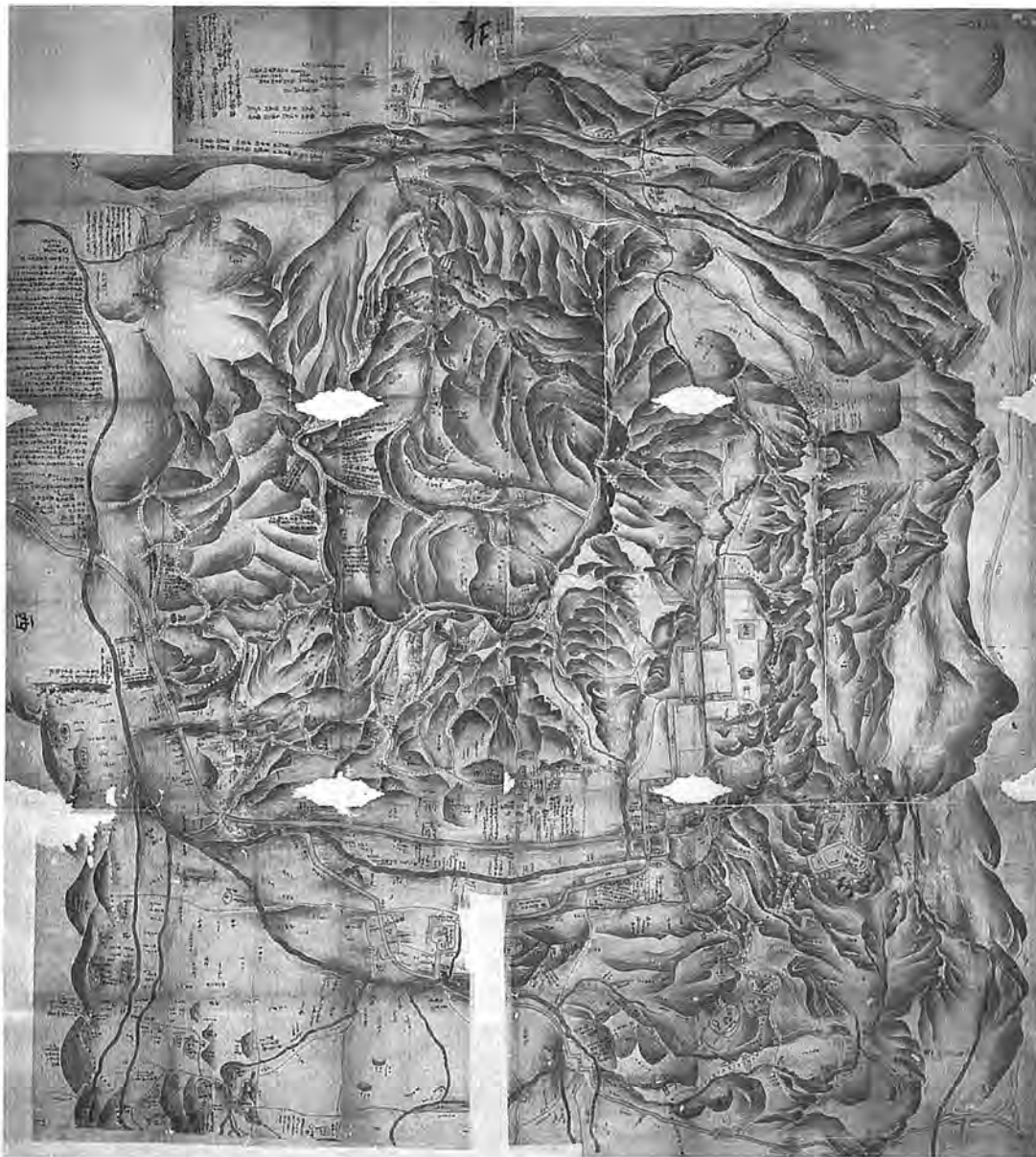
その間、文永の役(元寇)を前にして来日した元の使者の接待役なども務めたのではないかと思います。

慌しい世の中を見つめてきた大応国師も今はひっそりと山かげに座っていらつしやいます。

太宰府

1992
5.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



写真提供・九州歴史資料館

太宰府の文化財 ⑧

太宰府旧跡全図

江戸時代

北図 縦一四〇セツ 横一二七セツ
南図 縦一四一セツ 横一二六セツ
木村明敏氏蔵
福岡市博物館蔵

太宰府旧跡全図は大野城とその南麓の観世音寺・五条などの太宰府の中心部を描いた北図と写真とと基肄(椽)城を中心とする筑紫野市一帯が載る南図との二図があります。

描かれた時期は、江戸時代後期の文化三年(一八〇六)と思われ、そのころの太宰府周辺の様子を知らる上で貴重です。

たとえば、観世音寺の周囲にはたくさん書き込みがあり、現在では伝わっていない西福寺・妙見寺などの観世音寺の子院のいくつかの場所がわかりました。

また今の五条駅の辺りには、今川了俊の築山の跡や居城などという記載もあります。それから御笠川に架かる五条橋はこのころハカタバシと言っていたようです。

他にも、種々の書き込みは、現在では失われてしまった地名や所在地を教えてくれるなど、この旧跡全図は大宰府研究にとって重要な資料の一つです。

最後にこの絵図の作者はだれかはつきりしませんが、太宰府六度寺(原八坊の一つ)の船賀法印の可能性が強いといわれています。

太宰府

1992
6.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑧5

古瓦 (一)

奈良時代

大宰府遺跡出土



老司 I 式 軒瓦

昨秋の台風で屋根瓦を飛ばされ、困ったお宅も多いと存じますが、今回はその貴重な瓦の話です。瓦の作り方は日本では六世紀末に朝鮮半島の百濟から伝えられました。初めは瓦葺きの建物はお寺ぐらいでしたが、奈良や京都に都が造られ始めると、宮殿や重要な

役所は瓦で葺かれるようになります。しかしまだ、ほとんどの家が草や板葺でした。瓦が一般の人々の家にも普及し始めるのは、江戸時代以降と考えられます。

瓦の形はいろいろありますが、基本的には、板状の平たい平瓦と円筒を半分にした形の丸瓦です。(写真は軒丸瓦(上)と軒平瓦(下))現在、一般に使われているのは棧瓦といって、丸瓦と平瓦を一つに合わせたような瓦で、江戸時代に

考案されたものです。さて太宰府でも、遺跡を発掘すると昔の瓦が見つかります。代表的なのは、写真の老司式瓦と鴻臚館式瓦です。

老司式は福岡市南区老司の窯跡で最初出土し、鴻臚館式は平和台野球場の鴻臚館跡から発見されたので、この名が付きましました。太宰府では老司 I 式瓦は観世音寺から、鴻臚館式は大宰府政庁跡からその多くが出土します。



鴻臚館式 軒瓦

太宰府

1992
7.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



(写真提供・九州歴史資料館)

太宰府の

文化財 ⑧⑥

古瓦 (二)

前回は老司式と鴻臚館式の軒先瓦を取り上げました。軒先瓦の文様は瓦の年代を決定し、ひいてはその瓦を葺いていた建物、遺跡の時代を考えるうえで、重要な手がかりとなります。

また文様の類似性やどの系統に属するかなどを調べることによつて、遺跡の文化的なつながりはもちろん、政治的、経済的な関係を推し測れるなど、瓦の研究は、歴史研究にとって大事な分野の一つです。

さて、老司式と鴻臚館式の瓦は八弁の蓮華文や唐草文が瓦の先を美しく飾っていますが、ほかに瓦の表面に文字が印されたものがあります。(上記写真)

文字瓦とよばれるもので、普通はへら書きや印などが押されていますが、大宰府出土のものは、瓦製作段階で粘土を叩きしめる叩き板に刻まれた文字が、瓦に残ったものです。これらの文字は、その瓦が作られた工房や、それが葺かれた建物の名を表しているのではないかと考えられています。

大宰府出土の文字瓦は、平安時代に焼かれたものが多いようです。

太宰府

1992
8.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



縦71センチ 横177センチ 太宰府市所蔵



縦82センチ 横177センチ JA筑紫所蔵

太宰府の

文化財 ⑧7

扁額『議事堂』板に墨書
扁額『蔵輝』紙に墨書

明治時代

これらは宮小路康文が書いたものです。

「議事堂」は太宰府町役場を経て現在、市議会議場入口に掲げられています。「蔵輝」は市役所前のJA筑紫太宰府中央支店三階の大会議場にあります。

康文は江戸時代の文政九年（一八二六）に、夜須郡中牟田村に生まれ、十二歳で天満宮の衆徒六度寺の僧侶から戒を授かり、二十六歳で六度寺を継ぎました。

明治維新の神仏分離で還俗して宮小路康文、号を浩潮と称し、書家として大成します。

国会議事堂に掲げた扁額「帝国議會」（現在は行方不明）、平安神宮にある「應天門」などが有名ですが、他にも多くの額や掛軸が各地に残されています。長野県更埴市の屋代小学校には「屋代学校」という明治二十三年銘の扁額があるということです。

近くでは宗像大社、筑紫女学園高校、太宰府天満宮、新町の西正寺などにも康文の筆が残っています。

太宰府

1992
9.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



坊主面



女面



女面



熊坂面



翁面

太宰府の文化財 ⑧

六座の面

南北朝～室町時代
太宰府天満宮所蔵

十月に太宰府政庁跡で新能が行われますが、太宰府には能に使ったと思われる古い面が伝わっています。

それは太宰府天満宮の九月の神幸式（昭和六十一年九月一日号参照）の折に、竹の曲（昭和六十二年九月一日号参照）を奉納する六座の家に伝えられていたものです。

写真のように女面二面と坊主面、翁面、熊坂面各一面の計五面が現在も残っています。江戸時代には翁面が他に二面あったようですが、秋月藩主黒田長重の所望により、さしあげたと記録されています。

これらの面は、形の上からは能面といってもよいが、作風は自由で力強く、様式化された跡がなく、能面が完成する以前の古い形を伝えているといわれています。

翁面の裏には「赤子大夫」と刻まれており、この赤子大夫は「観応三年（一三五二）周防国仁平寺本堂供養日記」にみえる猿楽者赤子大夫ではないかと考えられています。

六座の人々が今に伝える竹の曲は、田楽に能楽の要素が混じり合った形といわれていますが、五枚の能面からも、室町時代、猿楽や田楽がやがて能として大成していく過渡期の様子が窺え、大変興味深いものを感じます。

これらの面は現在、太宰府天満宮宝物殿に展示されています。

太宰府

1992
10.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



太宰府の文化財 ⑧9

自然石梵字

鎌倉時代 宝満山中宮跡

市の東北にそびえる宝満山は、現在には多くの登山者で賑わう山ですが、古来、神が宿る山として人々に崇められてきました。今も山中にはかつての信仰の跡が見られます。

この自然石に彫られた梵字もそんな一つです。梵字というのは昔のインドの文字で、それを仏様を表すのに使った場合、種字といえます。

石には向かって右上に胎藏界大日如来、左に金剛界大日如来を表す種字が大きく彫られています。そしてその下に「工彫藤原 文保二戊午九月上旬 法眼幸栄十六度」と刻まれています。

文保二年（一一三二）は鎌倉時代の末で、幸栄という僧（山伏か）が十六回の入峰修行の記念にこれを彫ったのだらうと考えられます。石工は藤原某というわけです。

この大岩の向かいの岩にも、一面観音、釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来の四仏の種字が彫られていたということです。明治初期の排仏毀釈の折、削りとられて、今はその跡が残るだけです。

運よくその難をのがれたこの自然石梵字は、中世の宝満山の信仰の一端を表す遺跡として大切にしていきたい一つです。場所は中宮跡を過ぎて男道と女道に分かれる所で後ろを振り返ると見えます。

太宰府

1992
11.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財 ⑨ 墨書土器

奈良・平安時代
大宰府遺跡



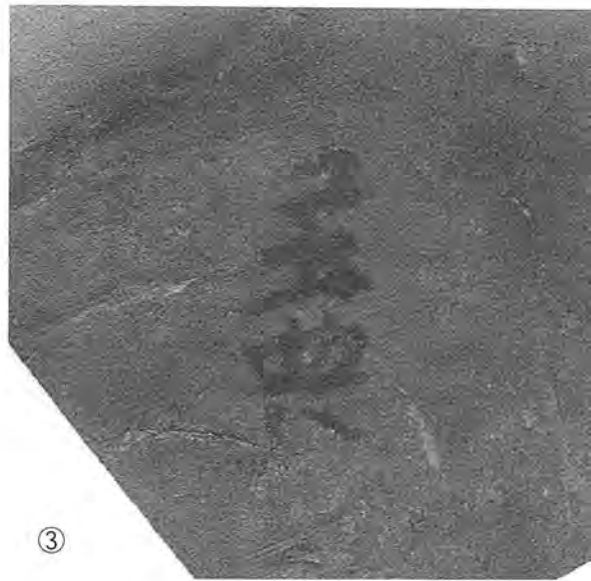
②



①



④



③

墨書土器とは、土器に文字や記号・絵などが墨で書き込まれたものをいいます。

文字の意味するところは、いろいろあるようですが、一つは場所の名や施設あるいは職名が書かれている場合、写真①②③などの例です。それは、土器の帰属するところを示していると思われま

す。そしてそれは、単にそういう施設があったとか、そんな役人がいたとかというだけでなく、もつと重要な情報も与えてくれます。「水城」は水城跡から発掘されたもので、その施設がまさしく「水城」と呼ばれていたことを裏付けました。

「大城」は大宰府政庁跡の前面の役所域から出土しましたが、万葉集の「大野山の頂を大城という」(巻十一・二九七左註「統いしぶみ散歩」今月号を参照)とあることに合致し、大野城を指すことがわかります。

写真④は、中心に「世音」、回りに「観」を巡らせて、どこからも「観世音」と読めるように書いています。これは神仏への祈りに使われたと考えられています。

以上のように、様々な情報をもたらす墨書土器は、歴史を解明する資料として価値の高いものです。

写 提供：九州歴史資料館